



七節商店街

花丸堂

CHOCOLATE

花丸堂

花丸堂

歳末大売出し

いちご大福

花丸堂

三色団子

メツチやあたる!?

ヒュウウウウウウウウ……

遠くに見える天河山^{てんかわやま}から、うなるような音をたててふきおろす冷^{つめ}たい風に、学校に向かっていたぼくは、思わず足を止めて身を縮^{ちぢ}めた。

二期^{ふた}期も終わりに近づいて、寒さは日に日に増^ましていたけど、今年はこれでも暖^{あたたか}い方^{はう}らしい。

風のいきおいが少しおさまったので、ぼくがふたたび歩きだそうとすると、

「おーい、リク」

道の向こうから、タクミが手をふりながらかけよってきた。

白いセーターの上にランドセルを背^せおったタクミは、もこもことしたカーキ色のダウンジャケットを着こんでふるえているぼくを見て、あきれたように笑^{わら}った。

「なんや、寒^{なな}がりやなあ」

タクミは、ぼくが七^{なな}節^{ふし}町^{まち}に引^ひっこしてきて、最^{さい}初^{しよ}にできた友^{とも}だちだった。町に伝^{つた}わる七^{なな}思^ふ議^ぎを、いっしょに集めてまわったことがきっかけで、仲^{なか}よくなったのだ。

タクミはうすい雲におおわれた空を見あげると、

「それにしても、今年は雪^{ゆき}が降^ふらへんなあ」

といった。

タクミによると、いつもだったら十二月の半ばぐらいには、その冬はじめての雪^{ゆき}が降^ふるのだそうだ。

「へーえ、そうなんだ」



ぼくは道の両がわに広がる、いねがかりとられたあとの寒々とした田んぼを見わたした。

この町でお正月を過ぎ^すしたことは何度かあるものの、冬休みの前からいるのははじめてだった。

もともと父さんの実家があって、ばあちゃんがひとりで住んでいたんだけど、春先にはあちやんがけがをして入院したことがきっかけで、五年生の夏休みの終わりに、ぼくと父さんと母さんの三人で引っこしてきたのだ。

ちゅうとはんばな時期の転校に、はじめは不安^{ふあん}や反発もあつたけど、いまでは友達もたくさんできて、自然^{しぜん}いっぱいのこの町が、すっかり好き^{すき}になっていた。

前に住んでいた町では、冬でも雪を見ることはほとんどなかったし、あつてもチラホラと舞^まう程度^{ていど}だったとぼくがいうと、

「こっちはしょっちゅう降^ふるで。ひどいときには、このあたりまで積^つもるしな」

タクミはそういって、自分のひざを両手でたたいた。

「ほんと？」



ぼくは目を丸くした。

いままでも、冬休みに遊びにきたときに、雪が降^ふったことはあつたけど、そこまで積^つもっているのは見たことがなかった。

「そやけど、昔はもつとすごかつたらしいで。じいちゃんに聞いた話やけどな——」
先に立って歩きながら、タクミは語りはじめた。



いまから百年以上前の話。

村のはずれに、母ひとり子ひとりの親子が住んでいた。

大工の見習いをしていた息子の小太郎は、親孝行な上に信心深いことで有名で、毎朝仕事に出かける前に、近所の稻荷神社へのお参りを欠かさなかった。

二人はびんぼうだが、つつましく幸せに暮らしていた。

年が明けてまだ間もない、ある夜のこと。

小太郎がねる準備をしていると、母がとつぜん胸をおさえて苦しみだした。

「うう……ううう……」

「だいじょうぶか、母ちゃん！」

ふつうの家には電話などない時代。医者を呼びにいくため、家を飛びだした小太郎

は、目の前の光景に言葉を失った。

見たすかさず、真っ白な雪にうめつくされていたのだ。

昼過ぎから降りだした雪が、夜になっていきおいを増したようだ。

さいわい、いまはもうやんで、空には半月がおぼろに光っている。

小太郎は、ひざまである雪を必死にかきわけながら、医者の家へといそいだ。

降りつもった雪が、夜風にザザッと舞いあがって、小太郎の体にふきつける。

冷えきった体にあせをかきながら、小太郎はけんめいに走った。

しかし、医者の家まであと少しというところで、とつぜん足の下の地面がなくなつたかと思うと、小太郎は悲鳴をあげるひまもなく、雪の中にすっぽりとうまってしまった。

月明かりにまどわされたのか、どうやら道を大きくそれて、畑と畑の間にある深くてはばの広い用水路のようなところに落ちてしまったようだ。

小太郎はあわててぬけだそうとしたが、もがけばもがくほど、体はずぶずぶとしずんでいく。

あせが急速にこおりついて、体温がどんどんうばわれていくのがわかった。
声を出そうにも、口を開いたとたん、雪でのどがふさがれてしまう。雪は道にも畑
にも等しく降りつもっていて、人が通りかかったとしても、気づかれることはないだ
ろう。

(このまま死んでしまうのかな……)

小太郎は死をかくごした。

しかし、なんとか母だけでも助けたい。

うすれてゆく意識の中、小太郎は手を合わせていのった。

(稲荷大明神さま……どうか母ちゃんに、医者を呼んでやってください……どうか……ど
うか……)

「……郎！ おい！ 小太郎！」

ほおをたたかれるかんしよくに、小太郎が目を開けると、勤め先の棟梁が、心配そ
うに顔をのぞきこんでいた。



狐火が助けてくれたなんて、ふつうだったら信じられない話だけど、この町ならそんなことが起こっても不思議じゃない。

そんな狐火だったら見てみたいな、と思いながら歩いているうちに、ぼくたちは学校に到着した。

七節小学校は、全校児童が二百人足らずの小さな学校なので、どの学年もひとクラスしかない。

五年一組の教室は、半分くらいの席がうまっていた。

二期の授業も今日で終わり。明日は終業式だ。

ぼくが机にランドセルを置いて、一時間目の準備をしていると、

「おはよう、リク」

同じクラスのシンちゃんが、声をかけてきた。となりにはソラのすがたもある。

「明日、昼から空いてるか？」

「空いてるけど……どうして？」

ぼくが聞くと、シンちゃんは笑って答えた。

「ギイが、本格的に寒くなる前に、遊びにけえへんかって」

ギイというのは、町を流れる月森川で出あった、怪談好きの河童のことだ。

ぼくとタクミ、シンちゃん、そしてソラの四人は、この秋、あるできごとがきっかけで、ギイと友だちになった。

なかでもシンちゃんは、はじめのうちは、たましいをぬかれるかもしれないって、河童のことをけいかいしていたのに、つり好きで意気投合したらしく、いまではすっかり仲よくなっていた。

「冬の間って、河童はどうしてるのかな？」

ぼくはふと疑問に思ったことを口にした。

「どうしてるのかって？」

シンちゃんが聞きかえす。

「だって、ずっと川にいるんだろ？ 寒くないのかなと思って……」

もちろん、川からあがることもあるけど、一日のうちの何割かは水の中で過ごすといっていたはずだ。